
白の空間に迷い込んだ僕と君

真貴人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白の空間に迷い込んだ僕と君

【Zコード】

Z9773C

【作者名】

真貴人

【あらすじ】

嫌だ・・・。生きているのが・・・。楽しくない。嬉しくない。悲しみしか生まないこの世界にいる意味なんて無い。『ミコージシヤン』を目指してた夢も、いつからか消え失せた。僕は、この世界にさよならをする。それは、真夏の暑い夜だった・・・

第一章（前書き）

「これ以上 何を失えば 心は許されるの?

どれほど痛みならば もう一度君に逢える

one more time 季節よ 移らないで

one more time ふざけあつた時間よ」

ラジオからは今話題のヒット曲、

「One more time - One more chance

e」が流れている。

僕も、ラジオから流れる曲に合わせて口ずさむ。

「いつでも探しているよ どこかに君の姿を・・・ 明け方の・・・

急に、僕の目から涙が込み上げて来た。

この歌を、『僕』が『君』の為に作ったこの歌が、

今、多くの人に感動を与えて勇気を与えているよ・・・

『君』も、何処かでこの歌、聴いてくれるのかな・・・

「この歌を聞く度に蘇る・・・君との、確かに存在した、君との時
間が

何処かに探してしまつ 君の姿を 存在するはずも無いの・・・

」

第一章

もう、嫌だ・・・
生きているのが・・・
楽しくない。
嬉しくない。
悲しみしか生まないこの世界にいる意味なんて無い。

思えば僕は何曲作つただろうか・・・

オーディションに行つては落とされ、路上で歌つては嘲笑れ、
『ミユージシャン』を田指してた夢も、情熱も、いつからか消え失せた。

僕は、この世界にさよならをする。

それは真夏の暑い夜だった・・・

今居るここは、星の見えない東京の一一番美しい景色が見える場所。空の光が全て地上に降りてきたんじゃないかと思ひほど東京の街は美しい。

愚かな人間たちが築き上げてきたものが、今、ひとつつの光となつて見える。

世界が消えればいいと思った、全身死ねばいいと思った。

けど・・・それを思つていてる自分が死ねば簡単に解決すると思った。だから、僕はこの世界にさよならをする。

靴を脱いで、遺書なんて無い・・・

いや、振り返つて見れば、僕にはこの世界に残せる物なんて何にもない・・・。

第一章

覚悟を決めた時、ふと脳裏を過ぎる。

走馬灯のように人々の顔が浮かぶほど、僕は人を愛せていたのだろうか？

答えを教えてくれる人は居ない。

答えを知つていなきやいけない僕自身がわからないんだ。

そんなこと・・・わかるはずもない。

人生で最後のジャンプは僕に躊躇を与えた。

と、同時にそれを上回る勇気をもくれた。

一瞬の無重力の後、重力の手の平はすぐさま僕の足を掴み、凄まじい勢いで僕を地上へと誘った。

夜の闇が僕の体を包み、目の前を眩しい光の群れが乱れ、飛び交う。

不思議と気持ちは穏やかだった。

僕の体を撫でては消えていく風は、

僕の悲しみ、苦しみ、憤りを全て洗い流してくれるよう感じ、心地良かつた。

「ああ、気持ち・・・いい・・・」

これが僕の、この世界に残した最後の言葉だった。

次第に視界は白くぼやけてきて、そして、真っ白に染まった・・・

- - 僕は 死んだのか？

意識が、僕の体から離れない。

なぜ？

指が動く。痛みはない。冷たい地面の感触。

「(・・・生きてる・・・?)」

恐る恐る、田を開けてみる。

白くぼやけた視界の向こうに見えるものが僕の記憶の断片にあるものを思い出す。

「これは・・・雪・・・?」

雪・・・それは、確かに雪だった。

僕の記憶が確かならば、さつきまで僕が飛び降りた町、僕が生まれ

育つた町、
『桜木町』に雪は降つていなかつたはず。

それ以前に、終わりかけとはいえた季節は夏だ。
おかしい。

・・・夢・・・なのか？

いや、違う・・・夢にしてはリアル過ぎる質感・・・
雪が、思い出すよりも先に、その冷たさを僕の肌に感じさせてくれ

る。

そう、これは間違いなくリアルだ。

髪の毛に積もつた雪を振り払いながら、薄い雪のじゅうたんの上に
僕は立ち上がる。

辺りを見渡すとそこには、見知らぬ街、見知らぬ人々。

みんな、僕が倒れていた事なんかには関心が無いようだ。

人々はみな、何処か、魂を抜かれたような・・・そんな印象を受け
る。

機械の様に、淡々と歩いている。

第二章

立ち止まつていると、肌寒さが僕を包む。

当然のよつこ着てゐる半袖を恨めしく思いながら、とりあえず僕は歩き出す。

- - ビートに向かえばいい?

あてのない見知らぬ世界に放り出されて強く感じる。

わざまで死に向かっていた僕の、肉体的に精神的に、なんという希薄なことか。

まるでなにをしていいやら、まったくわからない。

死人に近い僕の思考は、ゾンビのように群衆に交じりただ歩くことだけを遂行していた。

この世界からどうやって出ようかなんて、不思議なことにビートでもよかつた。

いくつものビルを越え、前にいる人々を雪よけに使いながら、三つ田に差し掛かった交差点で、気まぐれに僕は角を曲がった。待つてましたといわんばかりに、雪が僕の体に戯れる。

その状況を少しうとましく思いながら、人通りの少ない道を目的も無く、また歩き出す。

率直な感想、何もない。

何もないから、何も感じない。何も感じなくていい。
奇妙なこの感覚に、心地良さすら感じる。

奇妙なこの感覚に、心地良さすら感じる。

何も考えなくていいといつのは、なんと楽なことだらう。・・・。

殺風景から殺風景へと、裏切りなく移りゆく景色の中にデジャヴに

も似た

懐かしい記憶をぐすぐす 映像が僕の目に飛び込んできた

「公園」

ノリハナサカニシテ、ナガニコトナリ。

公園にはジャングルジムに、シーソー、ブランコ、鉄棒があつた・・

プラン「G」に目を戻す。

かすかに揺れるブランコに、白いワンピースを着た少女が一人、存在感なさげに、しかし無人の公園にしつかりとした違和感を与えていた。

•
•
•
半袖。

この寒空の下、半袖という選択ミスをしていたその少女に僕は妙な親近感を覚えていた。

真っ白い空の下、一人佇むその少女の表情は、どこか切なく寂しげで、『美しさ』とは違つた形容し難い魅力を感じるには十分すぎる程だった。

僕は、気がつけばその少女に見とれていた。

ざつ、ざつ、と公園の砂を踏みしめる音がやけに鮮明に僕の頭の中

に入り込んでくる。

気付けば、僕と少女の距離、約二メートル。

「…………」

じつ。

少女が僕を見ていた。

「あ・・・・・

わずかな動搖が僕の意識を取り戻す。

少女は僕を見ている。

僕と少女は目が合ったまま。

耐え切れない沈黙に僕は思わず口を開く。

「あ、あ、あの、君、か、可愛、い、ねー、

言つた瞬間に後悔した。

「（ああ、もつと他に言葉はあつただろう）…………」

・・・・・。

季節が通り過ぎたかと思つぽどの長い一瞬。

少女は - - 。

「あはつ

笑つた
・
・
・。

少女が口にした白い歯は、不思議と僕の心を穏やかにした。

「それって、ナンパのつもり？」

大きな瞳で見つめながら少女は僕に問いかける。
少女の言葉に僕は眉を細めた。

「な、なんぱ・・・? ナンパ・・・になつかうんだらうね・・・」

ナンパというものを知らずにナンパをしてしまったような僕の態度
に、

少女はまた笑つた。

「変な人。」

「そうだね・・・」

短い会話。

僕の独りよがりな勝手な思い込みかもしれないが、
その小さなやり取りで僕は少女とほんの少しだけ・・・通じ合えた
気がした。

「となり、いい?・・・ブランコ。」

僕は少女に向いて、希望にも似た問いを投げかけた。

少女は隣のブランコをちらりと見てから、視線を僕に戻して微笑んだ。

「どうだ。公共のブランコですか。」

『公共』という言葉に少しだけ違和感を覚えながら、僕はブランコに腰掛ける。

少女の横顔を覗いてみた。

僕の視線に気付いて少女は「ちらを見た。

その一瞬が、素直にうれしかった。

「ねえ、名前はなんていうの？」

夢見心地に浸っている最中、少女が僕に尋ねてきた。

「あ・・・僕は・・・。君は、なんて言つの？」

『僕』は自分の名前を教えた後に、少女の名前を聞きだそうとした。

「・・・くん」

少女は僕の名前に『君』を付けて噛み締めるように呟いた。

「よ、呼び捨てで良じよ・・・・・・」

「うん。分かった。」

「あ、君は・・・?」

再度、僕は少女に尋ねる。

「私は・・・。」

少女は自分の名前と、その由来まで教えてくれた。

「・・・長い名前だね。」

「あっがと。」

知らない自己紹介は、静かに終わりを迎えた。

第五章

僕は空を見上げる。

不思議だ。

さっきまで死のうとしていたのがまるで嘘だったかのよつて、今は
心が躍っている。
こんな気持ちは、長らく忘れていたものだ。

「ねえ、・・・」

「ん?」

「死にたいって思ったこと、ある?」

ドクン。

心臓が跳ねた。

僕の心を読まれたような錯覚に陥った。

「どうして?」

「ん、なんとなく。」

衝撃的な質問。

だけど、僕はその質問に答えたいと思った。

「死にたいと思ったこと……あるよ。

さつきまで死のうとしてた、いや、死に向かつてた。

死んだと思ったけど、気が付いたらこの世界にいたんだ」

「この、世界……？」

疑惑の視線を僕に向ける。

「信じられないかもしれないけど、僕はこの世界の人間じゃないんだ……」

「ふーん……」

正直、おかしいと思われるかもしれないと思った。
けど、彼女の反応は意外にも落ち着いたものだつた。

「驚かないんだね、変な奴だと思っちゃったかな？」

「ううん? 別に。」

「そう……ははは、実際は凄い事になつてるんだろうな。
何かの物語みたいだ。」

それから、僕は自身に起こつた出来事を話し続けた。

ミュージシャンを目指していたが上手く行かない現実。
気がつけばいい年になつていたのに不安定な生活。
そして、全てに絶望し、夢を諦め自殺を決意した事……

彼女は黙つて僕の話を聞いてくれた。

「君は、死にたいと思ったこと……あるの?」

話のキリが付いたところで僕は彼女に話を振つてみた。

「私は……うん……ある……よ。」

「そつか……」

少しの間をおいてみたが、彼女は詳細を話そつとさせず、僕もそれ以上聞くことはしなかった。

その後はとりとめもなく、僕と彼女はお互いのことを話し始めた。

時間が流れ、僕と彼女はベンチで寄り添つように座つていた。

この寒空に似合わない半袖を笑いながら、
僕達はお互いの距離を徐々に縮めていった。

「さ、寒いね……」

「うん。」

質問されたことに答えるだけ。

ただそれだけでも僕の心は満ち足りていた。

「寒い、ね・・・。」

さめつ。

「あ・・・！？」

不意に、彼女が僕の手を握つて來た。

それは、突然のことだった。

僕はその手を握り返した。

心臓のドキドキが、止まらない・・・。

第六章

僕の手が汗ばんでしまわなかと、気が氣でなかつた。

改めて見る彼女の手は透き通るよつに白く、存在しないよつに思えた。

なんともいえない甘酸っぱさが、僕を包み込むのが分かる。

彼女がはにかんで笑つている。

この一瞬は、きっと僕の中で永遠に輝くだろつ。
そう直感が感じさせてくれた。

だが、そこで僕は発見してしまつたんだ。

彼女の手首に、リストカットの跡があることを・・・。

今日、初めて出合つた僕と彼女。

心の傷に触れるよつ、楽しく話ををしていたい。

偽りざる素直な僕の気持ち。

そつと、見てしまつた事実を吹つ切るよつに僕は彼女の手を引いて

立ち上がった。

街へと歩き始めた二人の白い息は空に舞い上がりては消えていく。

彼女の手を握る僕の手の力は自然と強くなつていった。

そして、『決意』は、突然僕の胸にやつてくる。

「僕、決めたよ！」

僕は叫んだ。

「どうしたの、急に・・・？」

僕の右肩の少し下から、彼女が上目遣いで尋ねてくる。

「僕は・・・作詞をして、思いつきり歌を歌う・・・！」

僕はそう豪語した。

「なんで・・・？」

彼女はキヨトーンとした表情でそつ尋ねる。

「だつて、今日死んでたかもしれないのにこんな世界に迷い込んで、

君と出会つて、それだけでもすゝこと思つんだ、歌になるよ！

僕は絶対曲を作るよーよーし、やるぞー！

忘れていた『歌』への熱き思いが蘇つた・・・。

僕が突然発した熱量を、彼女はそつと微笑んで見守ってくれた。

「おめでとう、頑張つてね。」

嬉しい激励の言葉。

ただ、彼女の笑顔がわずかながら寂しさをはらんでいたと感じたのは、
僕の気のせいだらうか・・・。

第七章

それから僕達は時間を忘れて語り合つた。

何故だらう、今日出会つたばかりなのに彼女には何でも話せる。親にも話せなかつた事、いや、話そうとした所で聞いて貰えなかつた事も彼女は聞いてくれる。

彼女は以外と強気で『我儘』な部分を持つてゐる事も分かり、それがなおさら愛しくさせた・・・。

基本的に大人しい性格だが、食い違つ時には絶対に譲らない芯の強さも持つていた。

僕は気が付けば彼女に魅了されていた。

今日出会つた彼女の事が、本氣で好きになつてしまつた・・・。

雪は次第に強くなり、僕と彼女は更に身を寄せ合つていた。

だけど、不意に彼女の手が僕の手を離れていた。

彼女は一瞬うつむいて、すぐさま顔を上げて優しく微笑んだ。

「もひ、帰らなきや・・・」

気付けば辺りは暗くなり始めていた。

「そつか・・・」

名残惜しく僕は下を向き、自分の手を見つめながら二ぶしを開いたり閉じたりしていた。

タツ

突然、何かが駆ける音がした、と同時に僕の視界が黒に染まった。

ガツン。

「んん・・・！」

遅れた認識が徐々に戻り、視界が標準の世界を取り戻した時、俺の世界には、ただ彼女の顔があるだけだった。

そして、理解した。

・・・唇が重なり合っている。

女の子の香りが僕の鼻腔をくすぐる。

その甘美な感覚を堪能したいと思つた。

しかしその手前で、唇と唇はわずかにお互いを引っ張りながら離れていく。

「ん・・・」

立ち尽くす一人。キスというよりは衝突だった。
少し距離を離した彼女の頬には桃色がじんわりと浮かび上がついた。

情けないことに僕は放心状態で、その場から動けずにいた。

「じゃあねっ！」

「あ・・・！」

僕の言葉を待たずに、彼女は人通りの少なくなつた大通りの向こうへと走つていった。

彼女の後ろ姿が消える前に、僕はどうしても、確認しておきたいことがあった。

「・・・待つてくれ・・・・!」

僕は彼女の名前を叫んだ。

彼女は離れた位置で止まり、ぐるりとこちらに振り返った。

「また・・・また、会えるよねー?」

それだけが聞きたかった。

早く答えが聞きたかった。

彼女の唇が動いた。

もう、 会えない・・・

第八章

予想に反して、確かに聞こえた、拒絶の声。

「どうし……」

言葉を返せりつとした瞬間、僕の周りの空間がぐしゃり、と歪んだ。

「なに？ ……？」

僕の体がふわふわと風船のようになくなり、意識が泥を投げつけられたかのように不鮮明になる。

「落ち着いて聞いて……」

マーブリングのような世界の向こう側から、彼女が僕に話しかけてくる。

「私も、あなたと……同じ……」

「（どうして……）？」

「私も嫌なことがあって自殺しようとしていたの。
でも、でも……気付いたらこの世界にいた……」

「僕と、同じ……？」

「せうよ。私はこの世界に暮らして始めて気が付いたの。」
この世界は、絶望の行き着く先だつて……」「

「（・・・・・）」

「絶望のこの世界で、あなたは希望を持ってしまった。
そんなあなたの存在は、この世界では不自然な現象なの。

この世界は矛盾を許さない……

せひ、もうこの世界はあなたを否定し始めてる……」「

「ちよつと待つてよーせつかく会えたのに……そんなのつてない
よー。」

「もつと、自然な形で出来たらよかったのにつ……」

「自然だと不自然だと、じゃあ僕と君が会ったこの事実は何
だ!?」

僕と君が存在しているのに、触れ合ったのにつ……」

「ありがとう……楽しかった……」「

彼女の頬を一筋の涙が伝つていった。

「なんで過去形なんだつー君も、君も僕と一緒に行こうよおつー。」

「…。

・・・ブツン。

彼女の答えを聞く前に、僕に繋がる音声が遮断された。

歪んでぐにゃぐにゃになつた空間の向こう側で、

最後に彼女の唇が示したもの・・・

それは『う』の母音と『い』の母音だった。
『好き』にも見えたし、『無理』にも見えた。

• • •
• • •
• • •
• • •
• • •

A 10x10 grid of points. All points are solid black, except for the bottom row where each point is an open circle. The grid is centered horizontally and vertically.

- - 声が聞こえる。

「大丈夫か・・・？」

「おこつ・・・」

わずかな視界の隙間から、大勢の人が見える。

ぼやけた意識が加速度的に鮮明になるに従い、僕は理解する。

ここは、僕の元いた世界なのだと。
唇をなめると鉄の味がした。

「生きてるわおつー

ワアアアアア。

雄たけびにも似た歎声が辺りを包む。

僕は体を起こし、ゆっくりと立ち上がった。

幸い、怪我はないようだ。

「あの高さから落ちて、よく・・・

誰かがポツリと言つた。

そうだった。

僕は死のうとしていたんだった・・・。

僕の今のこの状態を、陳腐な言葉で表現するならば『奇跡』なのだ
らしい。

『奇跡』・・・今の僕にとつては虚しい現象でしかない・・・。

当然、彼女はいない。

僕は自分の手を見た。

そこにはまだ、あの温もりが残つていた。

それが、切ないくらい僕の胸を締め上げる。

「うつ・・・うあつ・・・べつ・・・ひべあつ・・・」

だから僕は、嗚咽をもじりして泣き始めた。

最終章

- - 数ヵ月後。

冬の訪れ。

僕は曲を作っている。

窓の外には雪が降っている。

僕は外へ飛び出した。

あの時を想わせる雪は、この醜い世界にも降る。

雪に君を重ねて、君が舞い降りてくれる気がして僕は天に両手を伸ばした。

手の平に、君を想わせる白い雪が舞い落ちた。
しかし、それはすぐに溶けてなくなつた。

僕に、胸の痛みだけを残して - - 。

あの時、僕は物質的な君を求めていた。
けれど、君はいない。

今、君は僕の中で精神的な希望となつていて。

僕は何時でも、何処かに君の姿を探してしまつ。

君の欠片を、君の姿を、君の笑顔を・・・。

何処かに君がいる筈も無い事は分かつてゐるのに、分かつてゐるのに・・・。

絶望に身を任せていれば、ずっと君と一緒にいたのかもしれない。
けれど、君と出合つて感じたことが、僕の希望になつてしまつた。

今になつて、ふと思つうんだ・・・。

『君』という存在は本当は存在していなかつた、嘘ではないのかと。

いや、嘘であつてはいけない。嘘なんかではない。

なぜなら創作に必要な想像力のまるで少しかつた僕が、
ここまでこんなにスラスラと、

君という存在、君と過ごした事実を歌にして書き綴つてゐるのだから、

嘘なんかではないんだ・・・。

漠然とした闇に恐怖し、理由なく絶望に身を投げた僕。

それに対して彼女。

まだ僕の脳裏に焼きついている、リストカットの跡・・・。

君の心の傷は計り知れない。

どれ程の痛みだつたのか・・・

僕も君と同じ痛みならば、味わえば、もう一度君に会えるのだろうか・・・

けど、今でも僕は信じている。

希望・・・いや、『願い』と言つべきか。

君が寂しくなつて、僕を好きになつて、
いつの日か君が、僕を追つてこの世界に来てくれるのではないかと・
・。

僕は最近思つんだ、『奇跡』って物がもしも起つてゐるなら、願いがもしも叶つなら、

今すぐ君に見せたいと・・・

希望に満ちた新しい朝が来る事を、

これから僕は君だけを守り続ける為に頑張る所を。

そして・・・そして・・・

あの時言えなかつた『好き』という言葉を君に伝えたい・・・。

虚しい幻想に身を任せて、死ぬまで君を待つと心に決めた僕は、
哀れな男なのかもしれない・・・。

けれど今、僕は君以上に大切なを見つけ出せないでいる・・・。

もしも命が繰り返すならば　何度も君のもとへ行きたい・・・
欲しいものなど　もう何もない。

君のほかに大切なものなど、何も・・・

こうして僕は、ひとつ曲を完成させた。
この歌が、君の元へと、届きますように・・・。

I
I
I
One more time óne more ch

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9773c/>

白の空間に迷い込んだ僕と君

2010年10月10日02時34分発行